群馬県立吾妻中央高等学校　学校評価一覧表　（令和５年度版）

（別紙様式）

羅針盤			方策	点検・評価		達成度	達成状況のまとめ及び次年度の課題	学校関係者評価
評価対象	評価項目	具体的数値項目		自己評価	外部アンケート等	総合		
Ⅰ　特色ある学校づくりに努めていますか。	1　特色ある教育活動を行っていますか。	①各科の授業や探究学習(総合的な探究の時間/課題研究/介護総合演習)において、思考し自己決定し行動する活動に取り組んだと回答している生徒が80%以上である。	・生徒自らが主体的に取り組む授業を実践する。 ・探究学習は、生徒自らテーマを設定し解決に向けて活動させる。	B	A	B	本校生徒は、昨年度に引き続き、探究学習に積極的に取り組んでいる様子が見受けられる。自己決定し行動する活動の創出と取組の充実が今後の課題と考えられる。	・生徒が自ら設定した課題に向けて活動に取り組むことはともて素晴らしいと思います。 ・自己決定がなかなかできない生徒への支援方法も工夫する必要がある。 ・探究学習については、生徒自身が興味を持った地域のことなどに触れる大変素晴らしい機会だと感じる。自身で考え、外部に発表・共有することは、社会に出てからも重要なことである。更に、各々の積極性を伸ばせるような工夫があると良い。
		②授業以外の本校の教育活動（学校行事・部活・委員会等）に参加し、やりがいを感じたものがあると回答した生徒が８０%以上である。	・学校行事等への主体的・積極的・責任ある取組を促し、自己有用感を育む。 ・創意と活力のある部活動により、達成感・充実感を育む。	B	C	C	「やりがいを感じる活動がある」と回答した生徒は、65.2%となり目標は達成していない。数値の動向はここ数年と変わらないため、コロナ禍による教育活動の減少が数値の低さの要因ではないことが見えてきた。学校行事・部活動・委員会活動等の内容や運営方針の改善が今後の課題と考える。	・コロナ禍で制限されていた活動を以前のように戻す難しさもありますが、経験や体験が大きな学びだと思うので、様々な活動の機会を生徒に与えてほしいと願います。 ・「自己有用感を育む」ためには「褒めてあげる」「肯定してあげる」「認めて評価してあげる」ことが大事になると思う。 ・80%以上という数値目標が少々高めなのではないかと思います。授業以外に65.2%の生徒がやりがいを感じていれば十分のような気もします。 ・学校行事や部活動以外に、探究学習等で出会った地域（まちづくり）活動団体等と共に地域活性化に向けた取り組みを行うことを提案する。高校生という立場の視点を持ちつつ、地域をつくる一足として取り組むことで、やりがいを感じる効果にも期待できる。
	2　資格取得に積極的に取り組んでいますか。	③普通科では、基礎学力向上のため、各種資格検定等の受検を積極的に呼びかけ、漢検および英検２級合格者１０名、準２級合格者２０名程度を目標とする。	・実社会での資格への評価を説明し有効性を説く。 ・合格に向けた指導や補習等を充実させ、粘り強く取り組ませる。	B	C	C	設定した数値目標には達しなかったが、上級学校の受験に際して資格取得の有用性は浸透してきた。ただ、受験料が上がっており保護者の負担は増すばかりである。最少受検回数で目標の級が取得できるよう指導したい。また、自治体によっては受験料の補助をしてくれるところもあり活用させたい。	・受験料を心配して受験したいのに受けられないのは残念なことだと思います。補助制度を積極的に活用してほしいです。 ・市町村ごとに助成制度も違うことから、一覧にしたような表にまとめてはどうでしょう？町村のホームページなどで情報収集はできると思います。 ・一人一人の人間力が問われる時代に、資格を持っていることの有用性を引き続き周知していくべきと感じる。今後の受験以外にも、将来の仕事とどう結びつくのか等の説明も補足できると良い。 ・資格取得をみんなで頑張ろうという雰囲気づくりが、学校全体や学年、クラスでそれぞれできるとさらに良くなるのではないか。
		④生物生産科では、年間１つ以上の資格の取得を目指し、卒業までに３つ以上の資格を取得することを目標とする。	・資格取得が進路の選択や実現につながることを理解させる。 ・担任や教科担当などと連携して動機づけに努める。 ・資格取得の指導を充実させる。 ・学科に関わる資格だけでなく、他の資格取得についても積極的に取得できるように指導する。	B	B	B	２・３年生では農業技術検定や農業クラブＦＦＪ検定など農業に関する資格だけではなく、漢字検定や英語検定など様々な資格に挑戦することができた。そのため２年生では６割程度、３年生では８割を越す生徒が３つ以上の資格を取得している。一方で、１年生では８割程度が１つのみの取得に留まっており各種資格にチャレンジして欲しい。また、資格取得した生徒は更に次の資格を目指す傾向が強いので今後も補習など指導の充実に努めたい。	・特色のあるカリキュラムや資格取得が更に将来に繋がることに期待したい。
		⑤環境工学科では、1年生は年度内に資格を1つ以上取得する。2年生は測量士補と2級土木施工管理技術検定の合格率をそれぞれ50%以上とする。3年生は測量士の合格者を1名以上とし、測量士補と2級土木施工管理技術検定の両方を保有している者の割合を40%以上とする。	・職業に関する国家資格取得の意義を理解させ、主体的に資格試験に挑戦するよう指導する。 ・Chromebookを用いた資料の提示やClassroomを活用して授業の質を向上させる。 ・実践的な内容となるよう学科内で意識を統一する。 ・対策補習については、動画を活用し生徒が自分の習熟度に応じて自ら教材を選び学べる体制を整える。	B	B	B	1年生においては、CAD検定でほぼ目標を達成した。2年性については土木施工は受験者の半数が合格したものの、測量士補試験については4名に留まった。3年生は測量士の合格者は出たものの、測量士補試験が振るわず、測量・施工の両方に合格した生徒は４０%に届かなかった。コロナを機に従来の全体補習を減らし、課題と動画学習を導入したが、生徒により取り組みにかなり差があると感じる。来年度以降は、学習環境を整えた上で生徒が取組む方策を工夫したい。環境工学科の生徒はほとんどが関連産業に就職あるいは関連学科に進学するため資格の重要性を伝え実感させることも重要であると捉えている。	
		⑥福祉科では、基礎学力向上のため「社会福祉・介護福祉検定」を全員が受験している。今年度は、全員が事前学習を行って受験することを目標とする。また、介護福祉士国家試験の合格率９０%以上を目標とする。	・学習ノートと介護福祉士国家試験用の問題集を活用し、家庭学習を行えるようにする。 ・各自の進度表を準備し、学習状態が確認できるよう見える化する。 ・自らの学習を振り返えり粘り強く取り組めるようにする。	B	B	B	「社会福祉・介護福祉検定」の学習と検定実施について計画的に実施することができた。今後は、合格する生徒を増やすための指導について検討したい。介護福祉士国家試験について、夏休みの補講は計画的に実施できたが、冬休みの補講については十分な計画ができなかった。また、問題集の進度表を準備することができたが、その後の指導が十分できなかった。	
	3　地域の小・中学校や企業・団体と連携していますか。	⑦学科の特長を活かした体験実習、地域や関係諸機関、教育機関等との連携・交流活動を実施する。	・生徒の知識・技術の深化、コミュニケーション能力の向上が図られるよう事前準備、事後指導等を行い実践する。	B	C	C	コロナの5類移行を受けて、普通科の「総合的な探究の時間」の取組、生物生産科の出前授業や様々な交流活動、環境工学科の出前授業や関係業界による講義や講習、福祉科の校外実習や外部講師による授業などを実施することができた。 各科の連携回数に限りがあるなかで、積極的に連携できたと考える生徒が20%、それほどでもないができた生徒が50%と考えればまずまずの結果ではないかと考えるが、より積極的に関わることのできる生徒を増やせるよう、各科の準備等を充実させていく必要があると思われる。	・積極的に校外に出て、地域と連携を図る意義は大きい。地域との連携は都市部の進学校にはない本校の特色、強みである。 ・吾妻地域の中核校として町村役場など行政との連携・交流活動を一層期待します。 ・体験や交流が苦手な生徒への呼びかけも工夫できると良いのではないか。 ・関係機関と連携することで、生徒自身に新たな発見がある可能性がある。また、小中学校との連携は、将来の生徒数の維持に不可欠であると考えられるので、積極的に取り組むべきである。
Ⅱ　生徒の意欲的な学習活動について適切な指導をしていますか。	4　生徒の実態に応じた指導を行っていますか。	⑧各学科における生徒の実態を踏まえて、到達度を見通すことができる学習指導を実施し、学習に対する達成感・満足感をもっている生徒が６５%以上である。	・生徒の実態に応じた授業展開やクラス編成を工夫する。 ・資格取得、検定、進学に対応した補習等を放課後や長期休業を利用して充実させる。	B	B	B	課題意識を持ち学習に取り組んでいると答えた生徒の割合が64.2%と昨年度とほぼ同じであった。習熟度別の授業展開や、生徒の進路に応じた選択科目を幅広く展開し、個々の希望に合うような取り組みを行うことができた。生徒に各科目の必要性を感じさせられるような授業や課題を工夫することが必要であると考える。	・よく取り組んでいると思う。 ・生徒の実態を教員が把握できていると感じる。授業内容等に工夫も必要だと感じるが、引き続き生徒に寄り添った指導を期待している。
	5　生徒は確かな学力を身に付けていますか。	⑨単位未修得者の割合は、全体の３%以下である。	・日頃から生徒の実態を把握し、学力の定着を図る。 ・学期毎に補習・追試験を実施する。 ・定期試験のみならず、課題・提出物・学習に向かう態度等により、生徒を多角的・多面的に評価する。	B	B	B	アンケートで家庭学習をほとんどしていないと答えた生徒の割合が30%と高い。成績不振の生徒の数も昨年度とほぼ同じ(6%)であるが、長期休暇を利用した指導でほぼ解消されている。テストの点数だけでなく生徒が身に付けべき能力に応じた評価方法を工夫し意欲を高めていく必要があると考える。	・部活をしていたり遠方から通学していたりしていると家庭学習の時間がとれないので、補習をしていただいてとてもありがたいです。
Ⅲ　生徒の充実した学校生活について適切な指導をしていますか。	6　組織的・継続的な指導を行っていますか。	⑩生徒に対する指導等の情報について、学年や学校全体で共有し、適切な指導ができていると認識している職員が80%以上である。	・生徒指導に関する職員研修を定期的に実施する。 ・学年会議、生徒指導部会議、企画委員会、職員会議等で必要な生徒情報について共有できる機会を設ける。	B	C	C	職員会議にて「令和５年度生徒指導に係る重点取り組み事項」について説明し、特に「法に基づく組織的な対応の徹底」が図れるように試みたが、職員に浸透しない事例が散見された。２学期には生徒指導に関する書式等の改善を行ったり、体制の再確認のための研修を行ったので、次年度も引き続きそうした取り組みを継続していく必要がある。	・きめ細やかな指導がなされている。 ・職人技的な教師に頼る生徒指導から、法に基づく組織的な対応に時代の流れは変わっていることを職員全体で理解・納得していくことが大切である。 ・今後、職員全体での指導等に係る事項の共有が、確実に行われることに期待したい。 ・なかなか難しい項目だと考えます。時間のかかる内容でもあるので、じっくりと取り組んで行く先生方の体制づくりをお願いします。
	7　学校はいじめの防止や早期発見に向けた取組を積極的に行っていますか。	⑪いじめや学校生活等の悩みや問題を、学校の教職員等に伝えやすいと認識する生徒が８０%以上である。	・学校生活アンケートを定期的に実施する。 ・計画的な二者面談や三者面談だけでなく、機会を捉えて積極的に面談を行う。 ・教育相談通信の配布、外部の相談窓口の紹介等、情報発信を積極的におこなう。 ・積極的にスクールカウンセラーに繋げる。	B	C	C	学校生活アンケートの実施時期や回数について事前の検討が足りず、面談週間とのリンクが上手くできず、十分に効果的なものにはならなかった。ＳＣの活用については希望する生徒が多く、一定の効果が上がったように考えられる。ただし、生徒が教員に悩みを相談することができる雰囲気は十分とは言えず、相談があった際の対応（特に初期対応）も適切なものであったとは言えない。次年度はいじめや希死念慮を抱える生徒に対する観察を丁寧に行い、早い段階で適切に対応できるような取り組みの構築が必要である。	・いじめや学校生活の悩みを先生方に伝えられないのはとても苦しいことだと思います。アンケート実施やSC活用、教師間の連携など引き続き取り組んでいただきたいと思います。 ・細かな点についてもよく観察すべきである。生徒に寄り添った指導が必要。 ・現状のSCの活用を維持しつつ、「いじめ」そのものについての指導も必要だと感じる。(発信者は簡単に情報開示される、損害賠償等に発展する等)
	8　生徒は健康で、規則正しい学校生活を送っていますか。	⑫定期検診の再検診対象で未受診の生徒が３０%未満である（特に歯科と眼科）。視力や姿勢などの健康面を意識してスマホやクロームブックを活用している生徒が７５%以上いる。	・将来にわたり健康な体を維持する大切さを、保健委員活動や保健便りなどで伝える。 ・再受診の重要性と早期治療の有効性について、保健行事や三者面談で直接伝える。 ・昼食後の歯磨きや休み時間の目の体操などを紹介し、将来継続的に健康を維持する姿勢を意識づけるような生徒の活動を実施する。	B	C	C	定期検診の再受診の重要性と早期治療の有効性については、生徒自身や保護者の理解と教職員の教育的な指導により、未受診者の生徒が３０%未満を達成できている。引き続き未受診の割合を減少できるようにしたい。その反面、デジタル機器利用が１日の生活時間の多くを占めることで、視力や姿勢に及ぼす影響に対しては、生徒自身の意識が向いていない様子もうかがえる。生徒１人ひとりに県から配付され、個々に応じた幅広い学習内容などに活用できるクロムブック（ノートパソコン）ですが、時間無制限で使うことができる環境にあることが懸念の１つだと考えている。デジタル機器は便利だけれども、長時間の使用により健康を脅かす物の１つだと生徒自身が意識して、適切に,活用しようと考えるように、今後も多様な方法で働きかけを続けていく必要があると思う。	・教育環境のDX化の流れの中で、新たな課題が見えたのではないでしょうか。本校だけでなく、県全体で考えるべき課題だと思います。 ・デジタルとの共存に、今後も工夫が必要であると感じる。
Ⅳ　生徒の主体的な進路選択について適切な指導をしていますか。	9　計画的な指導を行っていますか。	⑬学校での進路学習に対する高い満足度を持つ生徒の割合が８０%以上である。	・各種検査の実施や進路ガイダンスを学期ごとに開催する。 ・インターンシップ、オープンキャンパス等の参加・体験を推奨する。	B	C	B	高学年になるほど満足度は高い傾向にある。また、まだ具体的なガイダンスをしていない低学年生徒でもオープンキャンパス等に参加する生徒もおり、進路通信やガイダンス等を通して進路意識が高まっていると思われる。保護者についても高学年の保護者は進路により高い関心を持っているようだ。進路に関しては生徒、保護者、学校が連携していく必要があり、進路行事や面談等の充実を通して、早期に実現に向けての取り組みができるようにして、よりよい進路選択の支援をしていきたい。	・進路に関する情報やオープンキャンパスの案内など、保護者にももっと発信していただけるとありがたいです。 ・それぞれの進路指導はよく行き届いていると感じられる。 ・現状を維持しつつ、より多くの選択肢を生徒に提供できるための情報収集等が必要であると感じる。地域のでインターンシップなども、将来を具体的に想像させるために有効である。また、それによって進路の選択肢が増える可能性もある。
	10　生徒は自らの進路について真剣に考え、その実現に向けて取り組んでいますか。	⑭進路希望を明確にして努力している生徒が８０%以上である。	・ポートフォリオへの取り組みやフォーサイト手帳を使った振り返り活動を充実させる。 ・各定期考査期間に家庭学習時間調査を行うことで進路実現に向けての学力向上を促す。	C	C	C	やはり高学年になればなるほど、進路目標を定めて努力している生徒が多くなっている。反面、家庭学習時間を確保できていない生徒が高学年になればなるほど増えているのも現状である。これは多様な進路選択をしているためであると考えられるが、進路実現だけがゴールではないという意識を学校全体で作っていく必要があると考える。また、手帳の活用についても全体では２割程度になってしまった。学年団・担任の考えを尊重しつつ、意義の徹底をすべきだと痛感している。	・進路選択の一つである就職について、実業高校の伝統と誇りとしてもう少し選択する生徒がいても良いような気がします。それが吾妻地域の人口減少対策に大きく貢献することに繋がっていくと思います。 ・当校だけでなく、進路について明確にできない生徒が増えている印象を受ける。特色あるカリキュラムであることを活かし、具体的な将来像を形成できることを期待する。
Ⅴ　開かれた学校づくりに努めていますか。	11　家庭、地域社会に積極的に情報発信をしていますか。	⑮「学校の様子がよく分かる」と評価する保護者が８０%以上となるよう、日頃の学校行事、各科の情報発信を行う。	・HPの更新を定期的に行い、学校の様子や生徒の活躍について保護者や地域に発信する。 ・情報配信のデジタル化を進める。	B	B	B	アンケートにおいてHPを通して、学校の様子が「だいたいわかる」と答えた保護者は69%となった。HPを通して学校の様子をある程度保護者に伝えることができた。今後は地域住民や中学生に向けても、わかりやす情報提供を続けていきたい。	・現状のHPをブラッシュアップしつつも、HPそのものに訪れたくなるきっかけを作ることが大切である。地域に開かれた学校にするためには、地域と直接的に触れ合い、連携する機会を設けるべきだと感じる。
Ⅵ　教育デジタル化に努めていますか。	12　ＩＣＴを活用した指導を行っていますか。	⑯LMS（スタディサプリやClassroom）を利用した授業や課題の発出を行っている教諭が60%以上である。	・ICT活用した授業の事例を共有する。 ・利活用についての職員研修を実施する。	B	A	B	LMSを活用した指導を行っている職員は89.3%と目標を達成することができ、業務改善につながっていると考えられる。課題の評価方法ついての職員研修が実施されているが、実際の授業や課題の発出に活用しているかは不明であるため、次年度調査を実施したい。	・ICT活用の方向性は今後さらに進むと思われる。避けて通れないので教職員の研修も大事になっていくと思う。 ・課題点はありつつも、現状を維持し、更なる業務改善等に尽力していただきたい。
	13　ＩＣＴを活用した業務改善を行っていますか。	⑰担当している授業や分掌等（部活動や外部との連絡・連携を含む）において、ICTを活用して業務改善に取り組んだと回答する職員の割合が７５%以上である。	・業務におけるICT活用の事例や動画を共有する。 ・ICTを活用した業務改善を意識するように促す。	A	B	B	ICTを活用して業務改善に取り組んだと回答する職員は、82.1%と目標を達成できた。しかし保護者は、「積極的に活用している」の回答が54.2%にとどまり、社会や保護者のニーズには改善の余地があると考える。ICT活用が業務改善につながっていないと捉える職員の合意形成にも配慮しながら、業務改善に向けた取組を継続したい。	・保護者が低いのは単なる連絡手段程度にしか思っていないからではないか？だとすれば、情報発信の仕方等の工夫も必要であろう。